

関東空也門徒としての竺仙と如電

早乙女牧人

はじめに

細木香以（文政五〈1822〉～明治三二〈1870〉）の伝を収めることで名高い『恩』には、大槻如電による漢文序が付いている。『恩』刊行を企画した橋本素行（文政六〈1823〉～明治四〇〈1907〉。橋本仙之助・金屋竺仙）と如電とは、どのように結びついたのか。本稿では両者の関係について、「関東空也」および〈阿弥号〉授与という視点から考察する。なお、以降の本文で「竺仙」とあるのは、いずれも橋本仙之助・初代金屋竺仙のことを指す。

竺仙によって明治三三（1900）年に私家版『恩』が上梓されたことは夙に知られているものの、そもそもなぜ如電が『恩』のために漢文序を寄せたのか。そうした経緯はほとんど知られていない。『恩』の大部分の清書を担当した其角堂永機の難解な筆跡が、解説を拒んできたことも一因であろう。だが、幕末・明治期における、いわば裏側の日本史に光が当てら

れなかったことが、その最たる原因といえる。そこには身分や職業的区分といった境界線を排した人的結び付き、すなわち〈連〉的交流が確かに息づいていた。だが、これらは往々にして表立った資料として形跡を残さない。あたかも、吉原という言葉は多くの人が知りながら、吉原に生きていた女性たちの素性や故郷、その日常を探る手掛かりが、あまりに乏しいことと似ている。関東大震災や大戦を経て、貴重な資料が灰燼となったことも大きい。仮に烏有に帰せずとも、後世に学問的価値を見出されなかった冊子や書簡などは、人知れずに散逸するか雑紙として反故にされたであろう。そうした幾多の災厄を経てきた現代において、『恩』はかつての〈連〉的存在を証左する好史料である。竺仙のご子孫である橋本謙一氏は、『恩』をはじめ、数多くの貴重な史料を現在まで保存してくださった。〈連〉的な人脈は、十人がいれば、十人とも出自が不明瞭となることがある。逆に一人でも出自が判明すれば、芋蔓式に人脈の綾が解けることがある。竺仙

も如電も、『国書人名事典』から脱落した人物である。如電に至っては、大槻磐溪の子であったことさえ記されていない。関東空也という視点から論じた本稿によって、竺仙および如電を中心とした、幕末・明治期における裏舞台の人脈について、探求の一助となることができれば幸甚である。

(1) 橋本謙一氏のご著書『向島百花園句碑めぐり人めぐり』(二〇〇八年、金屋竺仙) およびご発言からは、本稿執筆のために必要な百花園句碑、空也門徒の知識、人物考証などで多大のご教示を受けた。ただし、本稿における翻刻や論証に関する一切は、筆者の責めに帰す。また本稿中の引用で「曼荼羅」とあるのは、橋本氏と伊藤一郎・筆者との対談記録「竺仙曼荼羅―五代目金屋竺仙橋本謙一氏の語る江戸通人の世界―」(『古典文学注釈と批評』第四号、二〇〇九年) を指す。

如電と関東空也

大槻如電(弘化二(1845)～昭和六(1931))は、本名を清修、通称を修二(修次、修治)、字を念卿といい、玩古道人、活魚人、天笑子などと呼ばれた。父は林家に学んだ漢学者の大槻磐溪(享和元(1801)～明治一(1878))であり、弟は『言海』を著した国語学者の大槻文彦(弘化四(1847)～昭和三(1928))である。浅草文庫の創設者で、静嘉堂文庫の一部は彼の旧蔵書から成る。本名として用いた号、如電は「如露亦如電」(『金剛般若経』の一文)から取り、『恩』序文にある「白念坊」の号は、自身が白癩(皮膚病の一種)であったこと(2)に由来する。考証家として博学

多才で知られた如電であったが、竺仙を取り巻く人々との関連性から調査していくと、彼の意外な来歴が浮き彫りとなる。

如電は、明治二五(1892)年七月十日付の『風俗画報』(四三三)に、如電居士の名義で「空也念仏」という小文を投稿している。この続編が、ちょうど一カ月後の同誌(四四号)に掲載されるが、そのときの名義は「優婆塞卍阿弥陀仏」である。この「卍阿弥陀仏」とは、『恩』で白念坊如電の署名に瓢箪型朱印で「卍阿」としたものと同じ号である。印形も、竺仙追善の一枚摺(本号掲載の翻刻を参照)にある「卍阿」の瓢箪型朱印と、おそらく同一である。さらに『風俗画報』(四三三)には「関東空門優婆塞卍阿弥如電謹白」とある。「卍阿」「卍阿弥」「卍阿弥陀仏」は、いずれも如電の別号であると同時に、いわゆる「阿弥号」ということになる。では、この「阿弥号」とは何か。そして自身の「阿弥号」を如電は如何にして得たのか。それを解く手掛かりが、如電が『風俗画報』に記した「関東空門」という自称である。これは、「関東空也門」もしくは「関東空也門徒」を意味する言葉である。結論から言えば、如電と竺仙との繋がりとは、両者が関東空也門徒であったことに起因すると推定される。

関東空也という言葉自体、一般には耳慣れないものである。奥田謙二著『食行脚東京の巻』(一九二五年、協文館)には、その名も「空也堂」といい、「空也最中」を名物とする菓子舗が載る(現在も店舗を構える)。焼最中によって名を馳せたが、初代店主に最中の薄皮を焼くという発想を与えたのは、竺仙と繋がりがあった九代目市川団十郎であったという。空也

堂の初代はじめ、花柳界に豪遊した人物であったというが、奥田によれば「空也堂の初代は、空也念仏の熱心な門中であつた、そして現在関東の門徒では、一番古い家筋である」(80頁)という。空也門徒については「他の講中とは、毛色の変つた連中で、金に屈托のない、娑婆に欲望のない茶人達で、世の毀譽褒貶に超越し、金銭利録に解脱した人々の、信仰によつて樹てられて居る」(同頁)と説明されている。だが、次に紹介する如電の寄稿文からは、彼らがこうした狭隘な説明で片付けられる人脈でないことが即座に理解される。また、関東空也門には確かに文化人も列したが、奥田の説明に「茶人達」とされたような、限定された人選ではない。これは、空也堂・空也念仏に關係深い、いわゆる鉢叩たちが茶筌売りも兼ねていたことから生じた誤解ではなからうか。

そこで以下から、如電の二回に亘る小文「空也念仏」に従つて、改めて関東空也門の実態を検証してみる。

関東空也の淵源は「空也」の名のとおり、市聖と称された空也(延喜三〈903〉〜天禄三〈972〉)にまで遡るようだ。六波羅蜜寺の立像で金鼓を叩く姿が示すように、空也門徒は念仏を唱えて鉦を叩きながら踊躍した。空也についての逸話は数多く、『雍州府志』第四巻が著名で、『風俗画報』(四三号)では、その類話を伝える。曰く、空也が閑居の友とした鹿を平定盛は狩猟した。鹿の死を悼んだ空也の念仏を聞いた定盛は、すぐに菩提心を起こす。空也は剃髪しようとした定盛を止め、俗体のまま定阿弥法師として弟子とし、さらに「鹿の角は杖の頭に挿み給ひ、又常に飲料の用と

て腰に付けさせ給ひし瓢を定盛に与へ、念仏修行の樂みは此中にあるべし」と(16頁。読点筆者。以下、引用文についてはいずれも同様)述べたとする。逸話の考証は措いて、如電はこのような形で空也の伝記を理解していた。故に、彼にとつて「瓢簞」は空也と繋がる重要な象徴のほずである。「卍阿」の朱印が瓢簞型なもの、空也の逸話に因んでいることは容易に推察される。如電によれば京都の空也堂は定阿弥によつて建立され、住職は代々世襲制であるという。『風俗画報』(四三号)に寄稿した明治二五年の時点では、八四世空良上人が空也堂に住持していたと思しい(18頁)。

如電が紫雲山光勝寺極樂院空也堂の門を叩いたのは明治一一(1878)年、彼が三四歳のことである。『風俗画報』(四四号、9頁)には、

余は明治十一年十一月西京に至り、清水愚阿弥(陶工六兵衛)の紹介もて空也堂本山に詣で、第八十三世空忍上人の徒弟となり、和讃の曲節より鉦鼓の間拍子に至るまで、総て上人の親授を伝へたり

と、その経緯が載る。この清水六兵衛とは、代々六兵衛の名をもつて受け継ぐ陶工の家系の人で、明治一一年における年齢を考慮すると、三代目六兵衛(文政三(1820)〜明治一六(1883))であろう。当時五九歳であり、第一回内国勸業博覧会などに出品して受賞の榮を賜り、京都博覧会の品評人も勤めた、清水家中興の祖とも称される人物である。⁽³⁾両者の接点については種々の人脈や会合が想定されるも確証はない。しかし、清水六兵衛も空也門徒であつたことは「愚阿弥」の号から察するところであり、彼が如電と空也門徒とを結びつけた人物ということになる。

如電は、定阿弥から続く「其門徒たる者は何れも俗体にて阿弥号を用ゐる」空也門の習わしに従い、「余は正阿弥と称せり」(『風俗画報』四三号、18頁)という。すなわち如電の正阿弥という号は空也堂から得たものであり、彼が空也門徒になったことを示す(阿弥号)でもあった。正阿弥の号を、空忍と空良のどちらから得たかは、『風俗画報』の文章では判然としない。ただ、如電が(阿弥号)を得る五カ月前に、彼は父磐溪を喪っている。父の喪失という事態があるいは清水からの誘いを承諾したことに、少なからず影響を与えているのかも知れない。正阿弥の号も、磐溪が「正翁」と号していたことと無関係ではなからう。

ともあれ、右の事実から、空也堂を中心とした一派を広く「空也門徒」として位置づけることができる。かつ、空也堂から「正阿弥」を得た如電が自らを「関東空門」と名乗ったことから、関東出身の人員によつて構成された空也堂の支部的存在を「関東空也」と称したことが推察できる。

『読売新聞』に拠ると、先に挙げた菓子店「空也堂」の初代は古市阿行という。元は日本橋堀留辺の豪商で「夢阿弥」の号を持ち、日本橋青物町の袋物商須原縫阿弥という人物とともに「空也念仏の親玉株」とされた。阿行の商売が傾きかけた際に「空也堂」という菓子舗の出店を勧めたのが、同じく菓子屋を営んでいた栄太楼であった。阿行を援けた理由は「空也念仏の仲間なるより気の毒に思」つたからという。すなわち、栄太楼の主人細田安兵衛も空也門徒だった。こうした商いに携わる者同士で連繫していることも、関東空也門の特色であらう。⁽⁴⁾

さて『風俗画報』では、如電によつて空也念仏の式次第が事細かに説明されている。同誌(四三号)では、「導師一人(木蘭色の素絹に五條の袈裟なり、叩鉦を胸前に懸け鹿角杖を携ふ) 従僧八人、黒の半素絹にて袈裟は小五條なり」(18頁)など、全一一名の装束から配列、誰がどの順番で何を行うかといった手順まで進行が克明にされ、如電の考証家らしい一面が表れている。祭文・三宝礼讃の文・六字の称名・和讃六首・詠歌五首、踊躍和讃を、拍子を取つて踊りながら唱えたという(四四号に六字の称名・和讃六首以外は本文が紹介されている)。

『風俗画報』に寄稿する前年である明治二四(1891)年五月五日、上野公園桜雲台において二百人を超える人々の前で執り行われた空也念仏では、如電が導師として表白文を述べた。この興行については後に取り上げるが、その際に如電は「優婆塞無々明院正阿弥如電」という名義であった。その一カ月後の六月一四日にも、大導師として彰義隊慰霊のために空也念仏を施行している(『読売新聞』六月一六日付、朝刊、三面)。時に四七歳。『風俗画報』に「空也念仏」を寄せるころには、関東空也門にとつて如電は缺くべからざる人物となっていた。

(2) 略歴はジャパンレヅジ版『国史大辞典』大槻如電の項、『20世紀日本人名事典 あくせ』(日外アソシエーツ、二〇〇四年、503頁)、号の由来は井上和雄「大槻如電翁の言葉」(『書物展望』第八巻第二号、145頁)を参照。

(3) 『角川日本陶磁大辞典』(松原龍一執筆担当、二〇〇二年、角川書店、409

（410頁）を参照。『恩』（76才）にも名があるが同一人か。

（4）古市阿行については『読売新聞』（以下、注記では『読売』）「風流合財袋（九）」（一九〇二年二月一四日、朝刊、六面）を参照。なお、細田が空也門徒であったことは「曼荼羅」（76頁）でも指摘されている。

竺仙と関東空也

『恩』刊行の前年、すなわち明治三二年の六月、竺仙は直接如電の元へ出向き、『恩』出版に関する一連の編纂を依頼していた。明治三三年六月一日付の如電による書き入れを持った岩瀬文庫本『恩』を用いて、丹羽みさとが『恩』の校正や彫刻の具合など、編集作業の労を大槻如電が取ったと明らかにした。^{（5）}『恩』漢文序を如電が執筆したのは、そもそも『恩』上梓に如電が深く関与した背景があったことになる。丹羽は如電以外にも、竺仙と福地桜痴・九代目市川団十郎との関係についても、諸史料から証明している。丹羽に拠れば「呉服商金屋竺仙の周囲には、服飾関係者を中心に様々な人々が集い、結果、福地桜痴と九代目市川団十郎との縁をつなげるようになった」と指摘する。^{（6）}ここでは「服飾関係者」の具体的な様相は措いて、桜痴と団十郎を交えた視点で論じてみる。

兩人とも著名であるため簡単に触れると、桜痴（天保二一（1841）〜明治三九（1906））は、鑄木清方の父である山々亭有人こと条野探菊らと「東京日日新聞」の経営に携わった人物。九代目団十郎（天保九（1838）〜明治三六（1903））は、八世団十郎の弟。俳名を三升、団洲、寿海など。

兩人とも竺仙は元より、香以とも交流があった。桜痴と九代目団十郎とは演劇改良運動に尽力した盟友であり、『恩』では竺仙の喜寿に祝画（58才）と祝詞（55才〜56才）^{（7）}を贈った人物として名がある。

ところで、明治二五（1892）年六月、歌舞伎座で空也念仏の祭文を戯化して芝居が上演された。^{（7）}演じたのは劇聖と呼ばれた九代目団十郎。祭文を擬して一篇に仕立てたのは桜痴である。竺仙に所縁の両者が空也念仏の上演を引き受けた背景には、二人の人物が関わっている。この上演に関する『風俗画報』（四三号）の記事に「本年（筆者注、明治二五年）六月歌舞伎座に於て市川團十郎が空也念佛を演じたるは、大概卅阿彌永井華阿彌（素岳）両氏の教詣に出づ」（19頁）とあって、それが判明する。「卅阿彌」は、もちろん如電であり、もう一人は永井素岳という書家・音曲家だ。彼は『恩』（6才）に「素岳君」として名が見える、その人である。

素岳（嘉永五（1852）〜大正四（1915））は、五世清元延寿太夫の襲名披露曲「青海波」の作詞を手掛け、音楽学校邦楽調査委員なども務めた人。^{（8）}素岳もまた「華阿彌」と称する関東空也門の一人であり、明治二一（1888）年には如電と空也堂で踊躍念仏会に参列した。^{（9）}素岳が如電とともに空也念仏に関する芝居に携わり得たのは、彼も門徒だったからに他ならない。故にこの芝居について、素岳は三升到念仏踊りの指導もした。^{（10）}

そして素岳は、如電とともに絵付けの皿を竺仙に贈って喜寿を祝っている人でもある（「曼荼羅」32〜33頁）。すなわち、如電、素岳、桜痴、九世三升は、『恩』刊行の明治三三年までに、揃って竺仙との交遊の輪にい

たのである。如電と素岳が絵皿を贈ったのは、単に明治期の大通に対する敬意からだけではない。さらに言えば、『恩』上梓に関して如電が「校正や彫刻」まで担当したのも、単なる遊興関係だけに端を発しているわけではない。竺仙もまた、関東空也の同朋だったからである。

如電が空也堂へ参詣して空忍上人の徒弟となった明治一（1878）年一月より先立つこと八カ月、竺仙は高野山で剃髪して金照院を賜号した（『恩』52才）。しかし、さらに遡ること一四年前の元治元（1864）年二月、橋本家に残る証文から、竺仙が空也堂において、まさに如電の師空忍から「悟心院竺阿弥凹心」を賜号されたことが分かる（「曼茶羅」76～77頁）。動機は不明ながら、この時、竺仙は空也門徒となった。刊記不明だが本文中に「空也堂八十一世」と見えることから、それ以降に空也堂で蔵版されたと思しい『瓢箪縁起・茶筌由来空也堂法類蓮名』と題箋された版本が、現在も橋本家に残っている。この一本にある「空也上人御和讃」に朱で声点の書き入れがされており、竺仙が空也念仏を学んでいたことが裏付けられる。さらに同書の末尾には「空也法類蓮名覚」と表題し、「竺阿弥仏」と署名する覚書が合綴されている（「曼茶羅」75～78頁）。「空也法類」と書き出すも、ここに載る竺仙を含めた総勢二五名は、併記された居住地から推して全員が関東空也の門徒で間違いなからう⁽¹⁾。

そして、この「空也法類蓮名覚」（以下、「蓮名覚」）に名を列ねる全二五名の筆頭、「勝覺院宗阿弥賢遊」こと星野又右エ門安春こそは、関東空也門の創立者である。『風俗画報』（四三号）で如電は「関東の空門は元治

元年星野宗阿弥（又左衛門安春日本橋檜物町の名主）創立す」（19頁）と述べる。星野が「蓮名覚」の筆頭に記された理由はここにあった。会員が和讃を行う空也念仏を江戸に広めたのは、星野が初めて本山から免許を受けたことを起源としている⁽²⁾。さらに、関東空也門の創始年が、竺仙が空忍から竺阿弥の号を得た時期と一致することから推して、竺仙が関東空也の初代門徒の一人であったこと、ひいては年次不明の「蓮名覚」が、あるいは元治元年頃の関東空也草創期における全員を記した、極めて貴重な史料である可能性が示唆されるのである。

今は「蓮名覚」の詳細な検討は別の機会に譲るが、如電の記した『風俗画報』（四三・四四号）の事実と、そこから類推された「蓮名覚」の一件を集合すると、明らかに竺仙は関東空也門では如電の先輩門徒にあたると判断できる。よって『恩』における如電の序文執筆の背景には、関東空也門徒の先輩門徒からの依頼という意味合いが新たに加わる。上梓された『恩』に「卅阿」の朱印があったのも、私家版の豪華さを際立たせるための単なる意匠とは言えなくなる。竺仙の喜寿を祝った発句の送り主に「角阿弥」「空阿弥」がいる（『恩』67ウ）こともまた、関東空也門という視点からの考察が必要なことを暗示する。前述の「空也最中」考案に九代目団十郎が関わるのも、「蓮名覚」に載る細田が関わることで必然性が増す。細田は空也門徒として竺仙と同朋だからだ。学者・役者・商人という異業種の交友圏に関東空也が重なるのは、あるいは耀異服商として比較的身軽な竺仙が各人の紐帶的役割を担っていたからともいえよう。

(5) 丹羽みさと「細木香以・金屋竺仙の交友圏と幕末明治の文芸」(前田雅之・青山英正・上原麻有子編『幕末明治 移行期の思想と文化』二〇一六年、勉誠出版、167～168頁)を参照。

(6) 注(5)に同じ。174頁。

(7) 『風俗画報』には名称がない。野島寿三郎編『歌舞伎・浄瑠璃外題事典』(日外アソシエーツ、一九九一年、135頁)より、「加茂空也運動競」か。

(8) 素岳の略歴はジャパンレヅジ版『日本人名大辞典』、『20世紀日本人名事典 そゝわ』(日外アソシエーツ、二〇〇四年、1760頁)を参照。

(9) 『風俗画報』(四四号、9頁)

(10) 井口政治著『団菊物語舞台訓』(三杏書院、一九四四年、137～139頁)

(11) 「空也法類蓮名覧」は縦二四×横一七・六糎。なお前出の細田安兵衛は、ここに「清浄院安阿弥蟻通」として名がある。

(12) 『読売』一九〇二年八月二日、朝刊、四面。

細木香以との関係から見た竺仙と如電

竺仙と如電の関係は、関東空也という接点以外には、細木香以を媒介にしたものが想定される。これまで三者に関係する共通項は、およそ『恩』という枠内に留まっているようである。⁽¹³⁾

竺仙と香以の関係は、同じく香以の取巻きだった仮名垣魯文(文政一二<1829>)～明治二七<1894>)が『歌舞伎新報』で連載した「再来紀文廊花街」(以下、「再来」)に詳しく、森鷗外が小史伝「細木香以」でも発表

したため比較的知られている。一方で、『恩』や「再来」といった資料の伝えないところで、香以は嘉永七(安政元<1854>)年頃に、大槻磐溪の門人になっていた。

この話は如電自身が語ったことで、彼が十歳前後の頃に「津国屋藤次郎」といふ商人がありまして、親父の磐溪の門人となり日々に我家に出入りしました⁽¹⁴⁾という。如電が十歳になったのは安政元(1854)年のことで、その頃は香以の父龍池が在世している。香以は父の監督下にあったから、あるいは磐溪との繋がりは、父龍池を通しての紹介かも知れない。

磐溪は香以のために漢文も作っている。如電によれば、

磐溪が此男のために孱愁社記といふ漢文の文章を書いて遣りました、善く罵しる事を漢語で孱愁と申します、香以が諸人の事を評論して悪口を申すから、親父もわるくちにこんな文字を用ゐたのです⁽¹⁵⁾

とあり、これが安政五年刊の『寧静閣第二集』に発表されたという。具体的なことは不明ながら、香以が少なくとも五年間は磐溪の下にいたことが窺われる。また、「或日の事でありました」として、次のような話もある。

香以が私しに向ひ、坊ちやん欲しい物があるなら何でも買てあげませうと云ひました(中略)江戸名所圖繪が欲しいと云つたら、宜しうございますと云つて帰つた、すると直ぐに、津國屋からでございますと云つて、子僧が江戸名所圖繪一部二十冊をよこしました

如電は香以の計らいに喜び、「私しが江戸の古跡や事實などを知て居ますのはこの名所圖繪の御蔭です、山城河岸の賜ものです」と回顧の文を続け

る。山城河岸とは、もちろん香以のことである。

安政元年当時、竺仙は三二歳である。初めは質屋を営業していた姉の元にいたが、「衣類など扱ひしより茲に呉服商を思ひ立ち、糶呉服となりて三十歳の頃始めて一本立に營業を始め、當時今紀文と云はれし山城河岸の津藤方¹⁶に出入し」たというから、香以が磐溪と接するころには、すでに香以の主要な取巻きの一人だった。もしかすると、後の如電との交流に繋がる糸口は、この頃にあったのかも知れない。

また竺仙は、コレラが流行した時期に菓錠「寶丹」で富を築いた九代・十一代守田治兵衛と守田祐孝（天保一二〈1841〉〜大正元〈1912〉）とも交流があった。

守田は明治維新前に出会った、ある菓買いの娘を探していた。明治二〇（1887）年前後のこと、守田は「淺草新福富町の風流染物業、例の竺仙と懇意で、其所へ遊びに來た時に竺仙から、其娘が今は零落して本所邊に居ると云ふ事を聞出して、直ぐ其座から竺仙を案内にして其家に行つて」¹⁷尋ね人に会うことが出来たという。商人としてお互いに昵懇だった様子が窺えるが、守田の逝去に伴つてこの逸話を紹介したのは如電だった。

この話は如電が竺仙から直接聞いたものと思しい。逝去した守田を偲び、守田家のために支店の柳澤鋤蔵が蒐集した守田に関する新聞記事や弔辞が「長祿餘薫」と題す附録として『東京業新報』に掲載された。そこには、寶丹創始のを始め、古銭蒐集家で酒豪であったこと、大変な信心家で蚤一匹にも「南無阿弥陀仏」と唱えたこと（ただし、守田が空也門徒

であったかは不明）などの記事が載る。守田の逸話を如電が竺仙から直接聞いたと推測したのは、重複する話が多い「長祿餘薫」に掲載された守田逝去に関する二八ある記事のなかで、竺仙との逸話が唯一如電の記事にしか出てこないためである。¹⁸

守田は、竺仙も属した歌舞伎の見巧者連中「六二連」の幹事であった梅素玄魚（文化一四〈1817〉〜明治一三〈1880〉）のパトロンだった。玄魚は「寶丹」の包み袋の図案を考え、販売代理店も営んだ。その守田が、自社宣伝のために出資した『芳譚雜誌』に、梅素の伝記「梅素小伝」が連載されたとき、執筆を担当したのは親交のあった魯文である。¹⁹玄魚も香以と交流があったことは魯文の「再来」から分かっている。香以が守田と関わったかは未詳だが、香以の歿する明治三（1870）年に四八歳だった竺仙は、あるいは玄魚や魯文を通じて、守田と関係を築いていただろう。当時二六歳だった如電がどこまで竺仙に接していたかは不明なものの、父磐溪の下で香以を見知っていた以上、香以を頂点とした交流の輪によつて竺仙を知ったのは、そう遅いことではなかっただろう。如電が空也門に入る明治一一年以降には、同じ関東空也の門徒として竺仙と交流があったはずだ。学者と商人という職業的垣根を超えた結びつきであり、それは期せずして竺仙も如電も少年期に出会った「香以」という共通項に端を発している。如電が遺した僅か二例に過ぎない逸話から、香以―如電―竺仙あるいは香以―竺仙―如電として、『恩』という枠を超えた繋がりを紹介し、彼らの人的交流を解明するには、江戸・幕末期に醸成されていた、分野や身分

に分断されない人脈に対する視野が不可欠であることを再確認した。かつ、両者の関係においては、これまで一顧だにされなかった「関東空也」という礎が、実際には交流の要諦であつただろうことが、新たな見地として逆照射されたのである。

(13) 竺仙と香以との繋がりとは、注(5) 丹羽論文、および越後敬子「其角堂永機の交友圏―金屋竺仙『恩』を中心に―」(『歌子』第二〇号、二〇一二年、実践女子短期大学)でも、主に『恩』をもとに言及している。

(14) 大槻如電「齋藤月岑事略」(『有名無名』第一号、一九一二年、11頁)。以下如電の伝える香以の話はすべて同資料の同頁に拠る。

(15) 『寧静閣二集』は国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」(http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0001401KTG)に画像あり。

ただし、原題は「憊懣社記」。

(16) 『朝日新聞』(一九〇七年三月九日、朝刊、六面)

(17) 大槻如電談「守田氏の性行」(『東京葉業新報』第一六八号、一九一二年、21頁)。明治二〇年は「今から二十五六年前」という如電の言葉から逆算。

(18) 注(17)に同じ。記事・弔辞の本文は1〜36頁。

(19) 山本野理子「梅素玄魚考 その生涯と芸術性」『人文論究』63(4)、二〇一四年(51〜75頁)

関東空也と其角堂

関東空也門を考える上で、いま一つ重要な動向がある。それが、其角堂

永機を中心とした晋派との関連である。

永機は本名を穂積美之(善之)といい、文政六(1823)〜明治三七(1904)の人。老鼠堂とも号し、旧派いわゆる江戸座の親玉といふべき俳諧師。香以の取巻きであつたことから竺仙らとの親交も厚かつた。明治三二年、『恩』刊行の前年には竺仙とともに永機も喜寿を迎えた。そうした縁も手伝い、乾坤二冊に分かれた『恩』の発句部分の清書は、ほぼ永機が担当している。その書体は流麗を超えた難解なものだ。だが、これは古風を銜つた単なる好事の結果ではない。実際には、江戸座の始祖であり蕉門十哲の随一であつた宝井其角の真蹟に倣つて、意図的に成形された筆致である。永機は其角の『五元集』に倣い『新五元集』を刊行している。彼らが晋派と称するのも、其角の号、宝晋齋より出たものだ。

明治三(1870)年、永機は第七代其角堂を継承した。竺仙が永機門下となつたのはその前年で、生前の香以も永機に親しみ彼に俳諧を教わつた。香以が名乗つた俳号のうち「キ造」は、永機門に入つた証である。永機は香以の歿後も、竺仙らの交友の輪に残り続けた。故に、彼らの〈連〉的な遊興に、近く遠く関わり続けたのである。関東空也門との関わりも、おそらく香以や竺仙という人脈に端を発するものであろう。

永機と交流のあつた人々が、各々其角の真蹟とされる書画を持ち寄り、それらを模刻した『七多羅樹』という本に纏めた。明治二〇(1897)年のことである。その編纂にあつたのが他ならぬ永機だつた。その『七多羅樹』の末尾には、ほぼ唐突な形で関東空也門からの敬白文が載る。それ

も道理で、そもそも『七多羅樹』は明治二九（1896）年八月二日午前十時、上野不忍池の生池院にて関東空也門徒と催行された、晋其角二百回忌の法会に基づき刊行されているからである。⁽²⁰⁾

これについて詳細を記した『読売新聞』（朝刊、八月三日、六面）に拠れば、「当日は永機の父螺鼠肝居士五十回忌も兼ねてい」て、来会者は三百名を超えた。其角の肖像を掲げた式場では永機らが手向けの句を詠んだというから、『七多羅樹』に収まる書画や発句は、これらの一部というところが窺える（ただし掲載された全員が法会の場合に居合わせたかは不明）。追善句の出詠が済むと「一同其角肖像の前に焼香し江澤梅逸はじめ其他一派の空也念仏」が行われたという。法会の催主は永機だった。⁽²¹⁾

法会に参加した梅逸とは、本名を江沢松五郎といい、神田連雀町の青物問屋「万屋」の主人。香以の狂号「何廼屋」（二世）を受け継ぎ、久保田米僊と雑誌も発刊した。このときは晋梅逸として「大補」という立場であった。⁽²²⁾晋派と分かるも関東空也門徒かは定かでない。さらに八月六日付の『読売新聞』では、導師を養寿院の権僧都栄海（浅草寺の住職か）が務め、この其角忌における追福連歌の宗匠を不白軒梅年が勤めたことを追加で報告している。六日付の『読売新聞』には敬白文の全文が掲載されているが、『七多羅樹』に掲載された文句とは少なからぬ異同があり、上梓する際に手直した可能性もある。

ともあれ、其角堂の宗匠永機が関東空也門徒と関わりを持っていたことが、これで証明される。それどころか、追福連歌で宗匠を勤めた原田梅年

もまた、関東空也門徒なのである。これまで梅年が俳諧宗匠あるいは俳人として、永機と繋がりがあことは種々の史料から分かっている。⁽²³⁾両者とも香以の取巻きであり、『恩』に発句が載り、『都之華』では宗匠の立場で投稿句の撰者だった。⁽²⁴⁾だが、梅年が「蓮名覚」から関東空也門の一員であり「黙々院劫阿弥梅年」という名であったことは、ほとんど知られていない。また、安政五（1858）年二月には永機が「準阿弥」号を遊行寺から得ていることも、多くは論じられていない。⁽²⁵⁾永機が関東空也であったかは今のところ立証されていないようだが、俳諧師という視点からだけの調査では、彼らの全容把握が困難であることは、この法会が物語っている。

さて、もう一つの疑問は、なぜ関東空也は晋其角の法要など執り行ったのか、ということだ。永機の人脈から関東空也門徒が集うのは自然だが、決定的ではない。そこで、少し時間を巻き戻すと、明治二四（1891）年五月五日に上野公園桜雲台で行われた空也念仏修行が想起される。如電が導師となったと先述したが、実はこの目的が「四山瓢の供養」なのである。その経緯は同年五月七日付の『読売新聞』（朝刊、三面）に詳しく、三井寺の座主久成が、松尾芭蕉の遺物「四山瓢」を手に入れた。そのため空也念仏して供養の法筵を営むというのである。

今の江州三井寺の座主久成法師ハ、今度芭蕉翁の遺物なる四山瓢を手に入れられ、空也念仏して供養の法筵を営まんとて、左の如き勸進状を寄せられたり

この久成とは、東京帝室博物館設置に奔走、自ら初代館長であった町田久

成（天保九〈1838〉～明治三〇〈1897〉）である⁽²⁶⁾。右の「勸進状」とは、「近江光浄院主一乗菩薩沙弥久成」として興行に伴い寄せた文である。摘録すると、芭蕉に所縁の地で「爾来二百年の間、世々の雅人韻士に伝はり余年幾はくもなし、御寺ハ粟津に程近し、かの翁が背中合せの旧蹟に因みもあれば僧都の御許にまゐらせん」と、奇縁にも四山瓢を得た久成が後世へ伝える意図で「あはれ同じ志しの人々よ、米五升を喜捨して四山の瓢に供養し給へかし」と呼びかけ、法会を主催した⁽²⁷⁾。

久成はこのとき円城寺光浄院権大僧正であつたが、空也門徒として（阿弥号）を得ていたかは分からない。しかし、公式履歴の外にある如電と久成との関東空也を媒介とした接近は興味深い。敢えて関東空也が招聘されたのは、瓢が空也にも縁が深い品物だからであろう。導師如電の表白文には次のようにある。

瓢ハ宗祖上人の常にめで給ふ所なれど、酒ハ五戒の一なり、其器と其用と似合はしからぬを不器用とこそ歎きたれ、今ハ米喰ふ虫となり、ひさご下戸も、しらふで踊らずばあらしまうだ南まうだ、打てよ叩けよ踊れよ跳ねよ、腹へらば中に米あり、喰たるまば寐て枕すべし⁽²⁸⁾

関東空也の門徒にとつて瓢は開祖空也の表徴でもあり、だからこそ踊躍念仏では瓢を持って唱導する。一方、向井去来が記した「鉢扣の辭」然り、芭蕉法会の翌日に落柿舎へ門人四人が集つたのが、元禄七年（1694）年霜月月一三日、すなわち空也忌だったことも鑑みて、芭蕉一門にとつても空也や瓢は特別な意味を帯びていた。このように瓢は空也と芭蕉との接点

である。ゆえに明治二九（1896）年、蕉門の末流である永機が主催した晋其角二百回忌で関東空也の念仏修行が行われ、『七多羅樹』の跋文に「明治廿九年八月二日勤行御東台西麓生池院」「関東空也門徒敬白」という敬白文が載つたのである。参考までに、敬白文の一部を挙げる。

夫此觀喜踊躍念佛謂空也上人竊蒙加茂大明神松尾大明神神勅為天下泰平国家安穩五穀成就萬民豊樂俯顧（晋 其角居士二百回忌／螺 鼠 肝居士五十回忌）追福⁽³⁰⁾

意義は変わつても、四山瓢を讃えることは芭蕉への追慕に繋がり、芭蕉への追慕は、江戸座として蕉風の流れを守る其角堂と志を一にする。明治二八年八月、永機は男雪人に庵号を譲つて阿心庵から老鼠堂に号を改め、日本橋倶楽部で祝吟の俳句を詠んだ⁽³¹⁾。連綿たる蕉風の流れを途絶えさせることなく、また旧派の老将として盤石の地位にあつた永機にとつて、翌年の其角二百回忌における関東空也門との接触は、新たな時代における空也と芭蕉との結節を意味する出来事といえる。そしてこの興行は、明治三〇年を目前に控えながら、江戸という時代そのものを顕彰した一大事業ではなかつたか。

（20）橋本家蔵本、早稲田大学本、国立国会図書館本の『七多羅樹』では明治三〇年を刊記とする。

（21）越後敬子「其角堂永機の俳諧活動―明治期編―」『実践国文学』八〇、198頁）

（22）注（21）に同じ。

(23) 永機と梅年とは共に千句を興行し江ノ島旅行にも出かけている。注(21) 184〜201頁を参照。

(24) 『都新聞』四二七三号附録『都新聞毎月附録都之華』(第二号、一八九九年三月二十四日)を参照。

(25) 拙稿「幕末期の遊行寺における阿弥号授与―細木香以らの活動を中心に―」『日本語・日本文学研究と注釈』第一号、二〇一〇年、21頁)を参照。

(26) 後藤淳郎「博物館書籍館長、町田久成―その宗教観を中心として―」(『教育雑誌』第一〇号、一九七六年、18〜27頁)を参照。

(27) 『読売』明治二十四年五月七日、三面

(28) 注(27)に同じ。

(29) 落柿舎の集まりについては、浪化編「となみ山」序(宮本三郎・今栄蔵校注、古典俳文学大系七『蕉門俳諧集(二)』集英社、一九七一年、101〜102頁)に描かれている。

(30) 『七多羅樹』跋文。「」内は割書を示す。

(31) 『読売』八月三日、朝刊、三面。ただし、『技藝之友』(第二号、明治四〇年、27頁)では「門人雪人に阿心庵を授けて羊岩庵と號す」とし、老鼠堂への改号は明治二十四年だと、永機の門人である桜々堂機春(造化庵機春。伊藤貞次郎のこと)が記す。

竺仙をめぐる二つの〈阿弥号〉

関東空也門が創設され、竺仙について言えば元治元(1864)年に「竺

阿弥」号を得たことはすでに説明した。だが竺仙が〈阿弥号〉を得るのはこれが初めてではない。竺仙は遊行寺からも「葦阿弥」という〈阿弥号〉を得ていたのである。

安政四(1857)年から文久二(1862)年にかけて、細木香以を中心とした一団が、複数回に分けて藤沢山無量光院清浄光寺(通称、遊行寺)に〈阿弥号〉授与を願い出た。⁽³²⁾この〈阿弥号〉授与と、空也堂とのそれがどのように繋がるのかは不透明な点が多い。ただ、当時遊行寺の上人だった尊澄(四一世藤沢上人・五八代遊行上人。明治三(1870)年八月遷化)と、香以およびその一団との間で行われた〈阿弥号〉授与に従い、竺仙は「葦阿弥」という〈阿弥号〉を得た。⁽³³⁾文久三年に香以が千葉の寒川村へ逼塞した後、竺仙が関東空也門として「竺阿弥」という〈阿弥号〉を得たことは興味深い行動である。これまで〈阿弥号〉という視点では香以側から指摘されることはあったが、竺仙と関東空也という視点で語られたことはほとんどない。加えて、香以の〈阿弥号〉授与と関東空也門のそれとは、後者が格段に強い宗教色を持っていることも留意すべきであろう。

誤解のないように先に記せば、遊行寺における〈阿弥号〉〈阿弥陀仏号〉とは、時宗の教団に属する男性(僧侶・俗人)に与える法号であり、そこには時宗開祖の一遍上人の思想が込められている。すなわち、南無阿弥陀仏の名号を唱えることで衆生は往生し、名号の世界では時衆も信徒も阿弥陀仏と一体なのであって、その意義から〈阿弥号〉を与えるというものである。自身の名の頭文字などを取って、○阿弥陀仏・○阿弥と名付けた。

これが時宗での〈阿弥号〉である。⁽³⁴⁾

問題は、通常、時宗門徒の証として時衆や信徒が名乗った〈阿弥号〉を、香以の場合は冥加料と引き換えに個人や仲間とで、とくに宗旨変えの意図もなく相当数を得ていたことである。世阿弥のごとく芸能集団が阿弥号を自称した例もあるため、一概に言えないが、同時期の『藤沢山日鑑』では彼ら一派以外での例が皆無である。香以の〈阿弥号〉授与は近世時宗史において異例の事態であった。

香以にとつての〈阿弥号〉は、『恩』(23オ〜32ウ)に載る馬十連などの〈連〉的性格を持った集団が、その結束力を表す一指標として互いに有した符牒のごとき渾名に近い。しかし空也門における〈阿弥号〉は、あくまで〈宗教集団〉の一員としての責務を全うさせるべく機能している。遊行上人から授与された〈阿弥号〉を、香以は比較的自由に取巻きへ配布したが、空也門における〈阿弥号〉には、そうした自由さが感じられない。むしろ、関東空也門徒としての個性を特定する一指標として、個人の上から動かし難いものであり、同時に渾名のごとき軽さがない。その意味で関東空也の一門は〈蓮名〉と称しながらも、同音の〈連名〉とはまったく異質な紐帯で繋がっているといえる。

如電による『風俗画報』(四三号)の先記の小文から、時宗の創始者である一遍上人による踊り念仏の濫觴は空也上人にあるという考えが空也門に通底していた節がある(18頁)。香以との〈阿弥号〉授与を機に、あるいは篤実な性格の竺仙が、帰依の心を動かされて空也堂を訪ねたとして

も不思議ではない。一方で、『恩』上梓の意図を考慮すれば、零落した香以を竺仙があつきりと見捨てて、新たに星野に鞍替えしたとは考えがたい。異質な二つの〈阿弥号〉授与が、どのように竺仙のなかで両立・併存、あるいは矛盾なく移行できたのか。その謎を解く鍵は、やはり香以の〈阿弥号〉願の中に隠されているようである。

『藤沢山日鑑』安政七(1860)年二月二日条によれば、「田中半四郎」「小倉佐平」「細木藤四郎」という三人が金一両ずつを献上して、それぞれ「董阿弥」「^(眼力)阿弥」「田阿弥」の阿弥号を授与されたとある。一人目の田中半四郎は『藤沢山日鑑』記載の住所からみて、加賀町の草創名主、田中平四郎であろう。「蓮名覚」から「田中平四郎政守」が「寛姓院田阿弥如海」と称す空也門徒であったことが分かる。「蓮名覚」は元治元(1864)年以降の記載と目されるが、『日鑑』の「董阿弥」を得た田中と同一人であろう。二人目の「^(眼力)阿弥」をもらった小倉佐平は、団子坂上(現鷗外記念室辺り)に質舗を構えた高木佐平(文化一一(1814)〜明治一二(1879)『恩』42オ)。最後に挙がる「田阿弥」を得た細木藤四郎とは、遊行寺における〈阿弥号〉願の中心人物だった細木香以(津国屋藤次郎)に違いあるまい。

右の事例から、後に関東空也門となる田中は香以とそもそも親しい間柄であり、竺仙が両者の知遇を得ていたこと。空也堂で〈阿弥号〉を得る以前から、竺仙も田中も香以の〈阿弥号〉授与に参加していたこと。竺仙が初めに号した「董阿弥」は田中から、董阿弥だった田中が空也門で名乗っ

た「田阿弥」は香以から譲られた可能性があること。⁽³⁵⁾こうした諸々のことが浮かび上がってくるのである。

さらに魯文の「再来」(第三回)には天保一一(1841)年頃、田中が香以の父龍池を危機から救った話が載る。町名主は世襲制のため天保期の田中が、竺仙と交流した田中である可能性は低い。仮に別人だとしても、龍池の時分から結ばれた町名主との交誼を息香以が引き継ぎ、その交誼を香以の取巻きであった竺仙も浴したことは想像に難くない。ならば、竺仙が田中らと空也門徒として結集したことは意外なこととは言えないし、香以らに与えられた愛称である「竺仙」をもって空也堂より「竺阿弥」の号を頂くのも、また自然なことであろう。田中は「天下大通金屋仙之助」の印を竺仙に贈った人物だが(「曼荼羅」41頁)、これも空也の同朋という由縁からかもしれない。いずれにしても、竺仙のなかで二つの〈阿弥号〉を戴くことは、決して香以の恩顧に背くものではなかったようだ。

竺仙にとって恩人香以と得た〈阿弥号〉授与の潮流は、元治元年に結成される関東空也門の「竺阿弥」へと連繋して程なく、馬十連の仲間らとの死別と時代的転換とともに一端は途絶えたはずである。明治維新と廃仏毀釈が遊行寺を襲い、御一新の過程で伝馬朱印状など特権は剥奪され、不断遊行廻国の旅は抑制された。⁽³⁶⁾当然、空也堂も同様に打撃を蒙ったであろう。明治初期に「神仏分離令」や「神仏判然令」が發布され、仏教が旧時代の垢穢のごとく暴力的に排除されるなか、江戸を象徴する最後の大通人香以が明治三年に黄泉の客となり、竺仙らにとっての〈連〉の中核は喪失する。

竺仙は精神的支柱を失い、渠の中で二つの〈阿弥号〉は完全に過去のものとなっていくはずだった。

ところが明治一年、竺仙は高野山で出家し、如電は空也門徒となった。新政府による神道国教化政策が頓挫し、仏教界が失地から回復してくる時期である。思えば、関東空也は数数の政策と無縁でいられた。太政官布告(肉食妻帯蓄髪等勝手たるべし事)、上知令(寺領の没収)と戸籍法(寺檀制度の廃止)の公布、教導職制と大教院への参加など、何ら彼らの妨げではない。⁽³⁷⁾本拠地である空也堂は別としても、本より幕府や皇室から許可を得た活動とは到底みなしがたい関東空也の有り方が却って幸いしたのではないか。もちろん、情勢に照らして活動を自粛しただろう。しかし、明治三年には素岳が「阿彌稱號の空也派、追々東京にも其數を増し、折々空也踊の催しなどある由なるが、未だ當地にハ其家の本據とすべきものもあらざりし故、京都なる空也寺の支堂を設けん」⁽³⁸⁾ために京都へ出立する。すなわち、この頃までには表舞台において空也念仏が再起していた。遂には〈阿弥号〉集団である「関東空也」によって江戸文化を追慕・顕彰するかのごとく、寛永寺の領域で念仏修行が催されるに至るのである。

竺仙は元治元年に空也堂で得た「竺阿弥」号により、如電とともに関東空也門徒として新たな〈連〉的繋がりを再開させた。竺仙にとって、関東空也として「竺阿弥」を打ち出し〈阿弥号〉の命脈を保ち続けることは、香以らと浴びた江戸の薫風を守る手段でもあったのではないか。竺仙は〈蓮名〉の中に、在りし日の〈連〉を託したのである。野山における竺仙

の出家は、阿弥号を不動のものとして過去と対話する決意の表れとさえ受け取れる。時代に翻弄され下火となった関東空也を、竺仙は「竺阿弥」として守り継いだ。それゆえ竺仙が逝去し、彼を偲ぶ一枚摺が企図されたさ、如電は「卍阿弥」として追悼文を手向けた。関東空也を継承する意志を、如電なりに冥途の竺仙へ示すためとは言えないか。

天皇が東京へ遷つてより途絶えた茶筌献上の儀再興のため、明治三五年に空也光勝会が誕生した。⁽³⁹⁾ その後も空也念仏の広範な活動が確認できる。⁽⁴⁰⁾

これらのすべてが、竺仙と如電が所属した「関東空也」を淵源とはしないだろう。また、関東空也は一種の宗教結社とも考えられるので、勅許を得た活動とは見做しがたい。だからこそ彼らによつて江戸に拡充された空也念仏は、時代の激変に遭いながらも明治・大正を経て、なお民衆の心に留まり続けたのであろう。

(32) 以下、注(25) 19～40頁を参照。

(33) 『藤沢山日鑑』(万延元年九月二十三日条)に金二百疋で「橋本董阿弥」が授与された記事がある。

(34) 今井雅晴著『一遍辞典』、平成元年、東京堂出版、29～30頁。

(35) 橋本家には安政七年二月廿一日の日付で藤沢上人が「董阿弥」号を授与した旨の証文が残る(『曼荼羅』40頁)。証文には授与者の名がなく、他者へ自由に配布が可能だったと思われる。

(36) 『清浄光寺史』(清浄光寺史編纂委員会編、遊行寺、二〇〇七年、278～281頁)を参照。

(37) 仏教史は養輪顕量編『事典日本の仏教』(二〇一四年、吉川弘文館)、奈良康明編著『新版日本の仏教を知る事典』(二〇〇五年、東京書籍)を参照。

(38) 傍点筆者。「空也堂」『朝日新聞』明治三十三年一月一六日、朝刊、四面。

(39) 「空也念仏の茶筌献納式再興」『読売』一九〇二年八月二日、朝刊、四面。

(40) ほか、空也光勝会については「九月一日執行の空也念仏」『読売』一九一八年八月二三日、朝刊、四面)がある。大正七年には日本初の婦人による空也念仏が行われ(「婦人の空也念仏」『同』同年二月二八日、朝刊、四面)、空也念仏の興行(「第二回婦人子供博覧会の本日の筆供養」『同』同年九月一日、朝刊、四面)や空也念仏のラジオ放送が行われた(「今夜の空也念仏」『同』一九二五年二月二七日、朝刊、一〇面)。

おわりに

竺仙と如電を関東空也の俎上に乗せて考察してきた。関東空也についてはあまりに不透明な部分が多い。空也堂と清浄光寺(遊行寺)との関係も(「阿弥号」という部分では今の私には皆目見当がつかない。素岳の生まれた嘉永五年に結成された「馬十連」の一人、於津武凹齋こと鷲傳右衛門(鷲寛太郎)は、関東空也が創設された年、竺仙へ鷲流狂言の曲名許状を与えた人物である(『曼荼羅』64頁)。「恩」に載る彼の戒名は「白池院鷲阿彌壽星居士」。居士号を省けばそのまま「蓮名覚」に載る称号となる。すなわち、彼も関東空也であった。百花園にある矢田蕙哉句碑の裏面に「空也門中」として、団十郎や梅逸らの名が鐫られたのも、蕙哉が傳右衛門の弟

子だからであろう。句碑の書は永機が認めた。同じ百花園にある柘植黙翁の句碑「茶筌塚」は、如電が揮毫した。碑面の裏には「関東空也門中」として九三名が刻されている。それでも、これらの名簿がすべて関東空也門徒であったのか、あるいは蕙哉や黙翁が、香以や竺仙とどのように繋がったのか、見えてこない。元治元年刊『春色三題漸』初篇や、慶応二（1866）年刊『春色三題漸』二編に現れた、功阿弥仏、光阿弥、遊阿弥、楽阿弥、鈍阿弥、福阿弥、橘阿弥とは何者なのか。香以の〈阿弥号〉授与や関東空也とどう関わるのか。元治元年に馬十連創始者の齋藤権右衛門が剃髪して是仏と名乗ることと、どう繋がるのか。竺仙の盟友であり、香以の取巻であった狂言作者の河竹黙阿弥が、後に遊行寺から阿弥号を戴くことは、これらの流れとどのように関わるのか。風流茶人と空也門徒との重なりなど、関東空也門徒を取巻く疑問は、空也堂の蔵版本や「蓮名覚」の詳細な検討と合わせて後考を期したい。

（さおとめ・まきと 本学非常勤講師）

【付記】本稿執筆にあたり「蓮名覚」を始め諸史料の翻刻・掲載のご許可を下さった橋本謙一氏に、この場を借りて深謝申し上げる。なお、初代竺仙の直系である同氏は「金屋竺仙」という看板で、五代目橋本仙之助を受け継ぎ、現在も江戸から続く商いを守り伝えておられる。

【第1号 目次】

近世節用集の付録呪（まじない）について 柏原 司郎

幕末期の遊行寺における阿弥号授与

— 細木香以外の活動を中心に — 早乙女牧人

乳幼児の言語行動と発達〈誕生〜六ヶ月〉概観 小林 千草

言語生活における複合動詞の使用実態

— テレビトーク番組・新聞から — 王 慧 杰

など

【第2号 目次】

「はいずみ」考 — 二人の女の対照性と主人公性 —

眞鍋 萌

幕末の『太平記』受容 有馬新七の場合 小林 千草

ヒロインたちの「上海」

— 横光利一「上海」における女性人物の役割 —

中澤 尊

など